

第2章 銃後

子どもたちの生活

遺骨をふるさとにかえしたい

天羽

宏さんのお話から

みなさん、戦争はどうして起きると思いますか。

いろいろな形の戦争があると思いますが、みんなが話し合って物事を解決することができれば、人が死んだり、負傷したりという悲しいことが起きなくてもすむと思うのです。しかし残念ながら、今までの歴史をみると、自分の領土を広げたいとか、資源がほしいとか、そのような理由で戦争が起きています。特に日本の場合は、物をつくる力はあるけれども、物をつくるための資源がなかったのです。その資源を求めて外国に手を出さなければならなかった、それが戦争につながったという悲しい歴史があります。

一番大事なことは、その犠牲になるのは、わたしたち国民、皆さん方だということです。皆さんくらのところに、私の父親は戦争にとられました。もう日本は戦争に負けるというわさが広がっている中でとられたものですから、鉄砲の弾ももらえませんでした。スコップ一丁で穴を掘って、一人一殺といって、竹やりで人を刺し殺すという悲惨な状態でした。私の父親は三十五歳で死にました。

その当時は、日本は「満州」などで戦争を行っていました。その際、一番働いたのが馬です。北海道は特に多くの馬を飼っていました。今は競馬の馬ばかりですけれども、その当時は、農耕馬と言って、帯広でやっているばん馬と同じように、非常に力の強い馬がいました。しかし、そういうものはすべて軍にとられました。馬がいなかったので、畑をおこすのも人の手でやらなければならなかったのです。

○満州
中国東北部。

○フィリピン 表紙裏地

私は、外国で死んだ自分の父親の骨を探し求めて三十年間、遺骨収集という作業をしてきました。私の父親はたまたまフィリピンで死んだものですから、フィリピンを

遺骨をふるさとかえしたい

○バレイシヨ じゃが芋。

今、あなたがたは学校給食で一日に何キロカロリーという計算をした上でご飯を食べていますよね。私たちのころはお米がなくて、麦を入れて食べるのもぜいたくな方でした。お米が足りないので、とうきびや大豆をまぜたり、南瓜やバレイシヨと一緒に食べたりしなければなりません。お金があってもお米を手にする事ができない状態が、昭和二十四、五年まで続きました。



大通公園も畑に

イメージ図

昭和二十年に戦争に負けて、「満州」や樺太、今のサハリンに住んでいた日本人が引揚げてこなければならぬ状態になりました。人口は多くなる一方で、当然、食べるものはありませぬ。札幌の大通公園は、終戦のころは今のような公園ではなく、畑にして食べるものを作っていました。そういうことをしなければ、札幌市の人口分の食料が足りなかつたのです。

○太平洋戦争 日本政府は、アメリカ・イギリスとの開戦後、それ以前から継続中だった日中戦争を含めて「大東亜戦争」と呼んだ。アメリカ側は、対

中心に遺骨の収集をしてきました。また、沖縄では、今も洞窟の中などに遺骨が残されています。潮の加減で、洞窟の中に入れるようになったときに探すのです。沖縄では約一万人の北海道の兵隊が死んでいます。

それでは、私が遺骨収集に行ったときのお話をさせていただきます。

土の中から出てきた遺骨は、全部焼いてからでないとい日本に持って帰ることができません。ですから、気温が三十五度から四十度近くの暑いところで、まきを積んで、その上に骨を置いて焼くのです。骨の中にはいろいろな虫が住んでいます。その虫を完全に焼き殺さないと日本に持ち込むことができないので、このようにするのです。焼くのに丸一日かかります。

太平洋戦争で国外で戦死した日本人は約二百四十万人です。

そのうち、こうして遺骨を外国から持つて帰ることができたのは百二十五万人しかないと言われています。つまり、まだ



特攻隊の出撃風景

イメージ図

日戦争を「太平洋戦争」と呼び、戦後日本でもこの呼び名が定着した。

○特攻隊 特別攻撃隊の略称。特に太平洋戦争中、体当たりの攻撃を行った日本陸海軍の部隊。

○儀仗兵 儀式などに使う装飾的な武器を持った兵士。

百十五万人の遺骨が外国にそのまま残っているということ。我々としては、一日も早くふるさとに帰ってほしいという気持ちで、毎年こうして遺骨の収集をしています。

フィリピンには、当時戦争に使われていた飛行場があります。日本の特攻隊がフィリピンの基地から最初に飛び出していった飛行場です。特攻隊の兵隊は、今でいう高校二年生から三年生の人たちです。片道の燃料しか積まないで飛行機に乗って、爆弾を抱えてアメリカの船に飛び込んでいくのです。一回行ってしまおうと絶対に帰れませんでした。

フィリピンのマニラの近くに、フィリピン軍とアメリカ軍と日本軍の合同の墓地があります。平和の記念塔ということで、自分たちがお参りに行くと、今でもフィリピンの儀仗兵が出て、戦死者の霊を慰めてくれます。

皆さんは、普段は水道の水を飲んでいますよね。フィリピンでの遺骨収集の作業中、日本のような水道の水はありませんから、川の水を飲まなければやっていけません。そういったことを兵隊たちはあたりまえのようにやっています。私が最初に遺骨収集に行ったとき、川の周りに無数の遺骨がありました。それはなぜかという、水が飲みたくて山を降りて来たところを撃たれて死ぬという繰り返しがあったからです。

結論として、戦争はこういう悲惨なものしか残していないのです。一般の国民が一番犠牲になるということを覚えておいてください。

DATA

平成22年度北区平和事業
聞き取り

- ・平成22年10月6日
- ・太平小学校



天羽 宏(あもう・ひろし)さん

- ・昭和7(1932)年生まれ
- ・札幌市北区在住

遺骨をふるさとにかえしたい